

通算第227回

2023年度(令和5年度)第1回史跡めぐり

香取神宮と伊能忠敬記念館・佐原の町散策

◎香取神宮

千葉県香取市にある『香取神宮』は、“関東屈指のパワースポット”として知られ、遠方からもたくさんの方が参拝に訪れる神社です。それもそのはず、全国に約400社あるという香取神社の総本社です。創建は神武天皇の御代18年(紀元前643年)とされており、2600年以上もの歴史を有しています。

御祭神は経津主大神(ふつぬしのおおかみ)です。経津主大神は日本書紀に登場し、「出雲の国譲り」に大きな役割を果たした神様です。出雲の国譲りの話を要約すると以下ようになります。

〈はるか昔、高天原(天上の神々の国)を治めていた天照大神(あまてらすおおみかみ)は、葦原中国(あしはらのなかつくに、現在の日本のこと)は我が子孫が治めるべきだと考え、天上の神を出雲国の大国主神(おおくにぬしのかみ)の元に派遣しますがなかなかうまくいきません。そこで、経津主大神と武甕槌大神(たけみかづちのおおかみ、鹿島神宮の御祭神)を派遣。出雲国の稲佐の小汀(いなさのおはま)に着いた二神は、十握剣(とつかのつるぎ)を抜き逆さに突き立て武威を示すと、大国主神は天照大神の命令に従い葦原中国を譲りました。〉

このことから、経津主大神(ふつぬしのおおかみ)は“武道・建国の神”といわれています。『香取神宮』に参拝する人は、家内安全、交通安全、勝運、厄除、商売繁昌、海上守護、心願成就、縁結び、安産…など、さまざまなご利益を求めて訪れますが、新しいことを始めるときや、勝負や交渉事があるときなどに訪れる人も多いようです。

『香取神宮』は亀甲山（かめがせやま）という小高い山に位置し、一帯は香取の杜と呼ばれています。第一駐車場から参道商店街を抜け、鮮やかな朱色の大鳥居をくぐると、石灯籠の参道が続きます。

その先にある石造りの鳥居をくぐると、立派な狛犬を従えた総門があり、これをくぐると重厚感のある総二階建てで壮麗な楼門がみえてきます。

門は、国の重要文化財に指定されていて1700（元禄13）年徳川幕府（5代将軍綱吉公）の造営。南側にある「香取神宮」の額は東郷平八郎の筆によるものです。また、迎え入れる両脇の像は、右が武内宿祢、左が藤原鎌足と云われています。

楼門をくぐると、正面に御殿があり、檜皮葺の屋根に柱や梁は極彩色で彩られた拝殿と、黒を基調とした荘厳で格式高い本殿（重要文化財）が威風堂々と構えています。本殿は楼門同様1700（元禄13）年の造営で、御殿廻りを一周できるので御祭神の御神徳を感じながら歩くこともお勧めです。



総門



楼門



本殿

◎伊能忠敬記念館

伊能忠敬は、初めて実測による日本地図を作った人物。忠敬は、私たちが普段、目にしている日本の形を、初めて正確に表した人物です。長い年月をかけて全国を実際に測量してまわり、日本地図を作成しました。当時の江戸幕府の将軍は、11代の徳川家斉（いえなり）です。江戸時

代も後半にさしかかっていたとはいえ、日本に近代化の波が押し寄せるのは、まだ先のことでした。忠敬は、現在のように精密な計測機器も、便利な移動手段もない時代に、徒歩で測量に臨みます。気の遠くなるような作業の末に完成した忠敬の地図は、精度が高く、人々を驚かせました。

〇生い立ち

忠敬は、1745（延享2）年、千葉県のある九十九里（くじゅうくり）町で父親の養子先である名主の家で生まれます。17歳のときに、佐原（さわら、現在の千葉県香取市）の有力商人・伊能家の婿養子に迎えられ、十代目の当主となりました（1762）。

当時の伊能家は、経営が傾きかけていましたが、忠敬は商才を発揮して店を立て直し、大きな財を築きます。裕福な商家の主人として、家業だけでなく村の運営にも力を尽くしました。

地域で飢饉（ききん）が起こった際には、私財を投じて村人を救ったエピソードが伝わっています（1785年・天明の大飢饉）。

〇50歳で天文学を学びはじめる

1795（寛政7）年、50歳になった忠敬は、家業を息子・景敬（かげたか）にゆずり、江戸で隠居生活を送ることを決めます。江戸に出た目的は、天文学を学ぶことでした。

忠敬は以前より、商売のかたわら、暦学（れきがく）を勉強していましたが、引退後は、もっと本格的に学びたいと考えます。暦学は、太陽や月の動きを観測して暦を作る学問のことで、天文学と深いかわりがあります。そこで忠敬は、天文学者の高橋至時（よしとき）の弟子となりました。至時は、天文学や暦学の第一人者で、幕府で「改暦（かかれき）」にたずさわるほどの人物です。

しかし、当時の至時は31歳で、忠敬とは親子ほどの年齢差がありました。若い自分に頭を下げ、熱心に学ぼうとする忠敬の情熱に感動した至時は、惜しみなく知識を授けます。このときに習得した知識が、後の測量に生かされることとなります。



伊能 忠敬

○全国を歩いて測量する

至時の下で学ぶうちに、忠敬は地球の大きさを知りたくなりました。しかし、そのためには蝦夷地（えぞち、北海道）まで行って、江戸との距離を測る必要があります。

当時は、一般人が幕府の許可なく蝦夷地に行くことはできませんでした。そこで至時は、蝦夷地の正確な地図を作る名目で、幕府に忠敬の蝦夷地行きを願い出ます。

ロシアなどの外国船の出没に頭を悩ませていた幕府は、至時の提案を受け入れます。こうして、1800（寛政12）年に忠敬は55歳という年齢で、蝦夷地へ向けて出発しました。忠敬は、蝦夷地の海岸を一步ずつ歩いて測量します。歩けない場所は船から縄を使って測量し、正確な海岸線を描きました。忠敬が提出した地図を見た幕府は、その精密さに感心し、全国の地図作りを依頼するのです。

○伊能忠敬の測量方法

忠敬は地図を作る際の測量で、当時、田畑の測量に使われていた「導線法（どうせんほう）」を用いています。導線法は、現地点から目印の棒までの距離と方角を測りながら進んでいく、シンプルな測量法です。

忠敬は、まず自分の歩幅を計測し、毎回同じ歩幅で歩けるよう訓練を重ねました。目印に到着するまでの歩数に歩幅を掛けて、正確な距離を求めたのです。

さらに、「交会法（こうかいほう）」と呼ばれる山の上から方位を測る方法も取り入れ、導線法で生じる誤差を修正しています。晴れた夜には天体観測を欠かさず行い、北極星の位置から緯度を割り出して測量結果の確認に使いました。

○完成前の73歳で亡くなる

忠敬の個人的な動機から始まった地図作りは、幕府の直轄（ちょっかつ）事業にまで発展します。多くの予算や人員が割り当てられ、より高度な測量ができるようになりました。

日本初の本格的な地図作りを任された栄誉と責任感を胸に、忠敬は老体に鞭（むち）打って旅を続けます。蝦夷地への測量開始から14年後、ほぼ全



国をまわった忠敬は、江戸で地図の仕上げに取りかかります（1817）。しかし、完成を目前にした1818（文政元）年に、病によって73年の生涯を終えました。忠敬の死後、弟子たちが地図を完成させ、1821（文政4）年に「大日本沿海輿地全図（だいにほんえんかいよちぜんず）」として幕府に提出しています。

◎佐原の町並み

水運を利用して「江戸優り（えどまさり）」といわれるほど栄えていた佐原。人々は、江戸の文化を取り入れ、更にそれを独自の文化に昇華していました。その面影を残す町並みが小野川沿岸や香取街道に今でも残っています。このような歴史景観をよく残し、またそれを活かしたまちづくりに取り組んでいることが認められ、平成8年12月、関東で初めて「重要伝統的建造物群保存地区」（重伝建）に選定されました。佐原の「重伝建」は昔からの家業を引き継いで今も営業を続けている商家が多く、「生きている町並み」として評価されています。



※樋橋（とよはし）

江戸時代、川を挟んで反対側にある水田に農業用水を運ぶ

ためにこの「^{とよはし}樋橋」が設置されました。一度忠敬の邸宅に水路を通して水に勢いをつけ、立体交差させる送水システムを考え出していたそうです。この樋を作ったのは伊能家の一族と考えられており、忠敬



は用水工事のために村絵図を作っていたそうです。現在は「じゃあじゃあ橋」と呼ばれ、30分に一度落水を見ることができます。「残したい日本の音風景100選」にも選ばれました。

2023年度 第2回史跡巡りお知らせ

- 場 所 …… 山梨または茨城方面を予定しています。
 - 日 時 …… 令和6年2月下旬または3月上旬を予定
詳しくは会報・区報をご覧ください。
 - 参加費 …… 維持会員9,000円 一般10,000円
(昼食、入館料、傷害保険料を含む。)
 - ◎ 申込み …… 維持会員：2月上旬
一般区民：2月中旬
平日の午前9時～午後4時まで
- ※ 教育センター分室内・中野区教育振興会事務局へ
参加費を添えてお申込みください。
- ※ 電 話 (直通) 3228-5544